海外ニュース

第三五回国際アジア・北アフリカ研究会議（ICANAS）——点描——

長崎法潤

一

本年（一九九七）七月七日から一二日までの六日間、ハンガリーの首都ブダペストにおいて第三五回国際アジア・北アフリカ研究会議（ICANAS）が開催された。筆者は、第三一回（東京・京都、一九八三年）、第三二回（ハンブルグ、一九八六年）、第三四回（香港、一九九三年）に参加しているが、今回も参加して発表する機会をえたので、ここにその報告を記しておきたい。なお、すでに「東方学会報　七三」（平成九年一二月二二日）において、全体にわたる詳しい報告がなされているので、筆者の報告は、参加した部会を中心にして研究会議についての点描であることをお断わりしておきたい。

本研究会議は東洋学の国際学会としては最も古い歴史をもち、第一回の研究会議は一八七三年にパリで開かれている。研究会議は、第一回から第一九回（パリ、一九七三）までは国際東洋学者会議（International Congress of Orientalists）という名称であったが、第三〇回（メキシコシティー、一九七六）から国際アジア・北アフリカ人文科学会議（International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa）に改称された。さらに第三二回（ハンブルグ、一九八三）からは国際アジア・北アフリカ研究会議（International Congress of Asian and North African Studies, 略称、ICANAS）という名称に改められている。

本研究会議は、主にヨーロッパで開催されていたが、第二次大戦後、アジアではインドで第二六回（ニューデリー、一九六四）が開かれた。日本では第三一回（東京・京都、一九八三）、そして前回は、返還前の香港で第三四回（香港、一九九三）が開かれている。

ところで、本研究会議に日本人として初めて参加したのは南条文雄と笠原研寿とである。オックスフォードでマックス・ミュラー博士のもとでサンスクリット仏典を学んでいた両氏は、マ博士の切なる勧めに従い、明治一四年九月にドイツのベルリンで開催された研究会議に、マ博士とともに参加している。それは、第五回（ベルリン、一八八一）の研究会議であり、南条文雄はそのときの印象を次のように記している。

「東洋学士会議においては当時ヨーロッパ学界の権威者がベルリン市に蝟集したのであるから、我われ青年の輩にとりてはこの上もないよき刺激であった。席上には私たちの知り合いのモニエル・ウィリアムス氏やマクドネル氏（現オックスフォード梵文学教授）も列席していた。モニエル・ウィリアムス氏は、

マ博士の梵文典においてkaをイタリックで書いてchaの発音をするのはよろしくないと言って盛んに論じていたこともあった。」（南条文雄著『懐旧録』、東洋文庫三五九、平凡社、一三六頁）

これは、当時ヨーロッパにおけるサンスクリットの権威であるマックス・ミュラーやモニエル・ウィリアムスが第五回の研究会議に出席したことを伝えるたいへん興味深い記録である。それとともに、ヨーロッパにおけるサンスクリット研究や東洋研究に貢献してきた本研究会議の歴史の重みをあらためて知ることができる。

二

ブダペストは落ち着いた美しい古都である。街の中央を南北に流れるドナウ川によって、西側が王宮の丘や博物館などのある山の手のブダ、東側が平地の市街がつづくペストに二分されている。今回の研究会議の主会場になったブダペスト経済大学は、ドナウ川の自由橋のたもとのペスト側に建っている。

開会式は経済大学の大会場で七月七日一一時より開かれた。（1）第三四回（香港）の会長・趙令揚（Y. Chiu）教授による引き継ぎのスピーチ、（2）第三五回研究会議の会長をつとめるハザイ（Gy. Hazai）教授（ハンガリー科学アカデミー会員）の開会スピーチ、（3）ハンガリー共和国のゲオンツ大統領（今研究会議のパトロンの一人）の歓迎スピーチ、（4）ヨルダン王国のエル・ハッサン・ビン・タラール皇太子（今研究会議のパトロンの一人）のスピーチ、（5）カダル外務省審議官のスピーチ、とスピーチがつづいた。

今回の第三五回研究会議が今世紀最後の会議となることから、総合テーマとして、「二〇世紀における東洋学―その到達点」をかかげ、今世紀における東洋学のすぐれた学者、研究の発見、新しい展開を回顧し顕彰して、二一世紀の東洋学を展望することを目的にしている。

ハザイ会長の開会スピーチでは、最初に研究会議の総合テーマについて言及し、つづいて次のように述べている。

世界における経済至上主義の傾向はその他の諸価値を犠牲にし、巨大な技術進歩と平行して、今日、文化と人間性にたいする真の理解が急激に薄れている。東洋学の研究者もこの傾向に無関心ではいられない。

この研究会議は、二〇世紀を通じて、二度の世界大戦やその他の困難を乗り越えてきた。しかし、一方では、東洋学の各専門分野の発展にともなって、さまざまな個別の専門学会やシンポジウムが生まれ、この研究会議の役割について疑問が提起されたことがあった。しかし、将来学者が直面する諸問題を想定すると、東洋学の全体性をもった学会が必要である。したがって、先達から引き継いできたこの研究会議を大切にして、東洋学の発展のためにこれを活用しなければならない。

ハザイ会長は最後に、今回の研究会議の標語に、ゲーテが「西東詩集」のなかで、

おのれを知り、他者を知るものは

ここでも認めるだろう―
東の国と西の国は
もはや分かちがたい、と。
［生野幸吉訳『ゲーテ全集』］

とうたった言葉を選んだことを述べ、今日では現実のものとなっているこの精神をもって学術交流に取り組むことは次の世代の仕事である、と結んでいる。［「東方学会報　七三」六―七頁、「開会式におけるハザイ会長の挨拶（柳瀬廣氏による要約）」参照］

開会式は主にスピーチだけの地味なものであったが、会場のホールは、集まった約五〇〇人の参加者の熱気であふれていた。時々、ホールの高い天井から陽の光がさしこみ、会場の雰囲気に変化をつけていた。

その日の午後から次のようなセクション・部会に分かれて研究発表が行なわれた。

Ⅰ古代オリエントと古代アジア（古代近東）
Ⅱ中近東と北アフリカ（ユダヤ教とヘブライ語研究、イスラム学、アラブ学、イラン学、オットマン・トルコ学）
Ⅲコーカサス（アルメニア研究、グルジア研究）
Ⅳ中央アジアとその関連地域（チュルク研究とその関連地域、モンゴル研究、マンチュー・ツングース研究、チベット研究）
Ⅴ南アジア（サンスクリット研究、インド研究とヒンディー研究、タミールとドラヴィダ研究、仏教研究）
Ⅵ東南アジア（タイ、ビルマ、ベトナム、クメール研究）
Ⅶ東アジア（日本研究、中国研究、韓国研究）
Ⅷ近代史とアジア・北アフリカの現状

さらに、次のようなシンポジウムも開かれていた。

(1)国際敦煌プロジェクト（ＩＤＰ）の「敦煌・トゥルファン・シンポジウム」
(2)東洋研究の歴史
(3)トルコ学研究史（ＩＵＯＡＳ主催）
(4)コンピュータと東洋研究
(5)東洋学図書館司書学会（ＩＡＯＬ）

三

上記のように、「南アジア」セクションは「サンスクリット研究」「インド研究とヒンディー研究」「タミールとドラヴィダ研究」「仏教研究」の四部会に分かれていた。そのうち、「インド研究とヒンディー研究」部会には最も多くの発表があった。今回、筆者は主に「仏教研究」部会に参加したので、同部会についてとりあげたい。

「仏教研究」部会には二つのパネルが開かれていた。そのうち、Haiyan Hu-von Hinüber女史がコンヴィーナーとなって「僧院の戒律についての研究」と題するパネルを設け、活発な議論がなされた。このパネルでは五つの発表があった。レジメも準備されていたので、レジメを中心にして発表内容を紹介したい。

フライブルグ大学教授の著名なパーリ学者 Oskar v. Hinüber 氏は、"On the Origin and the Structure of the Pātimokkhasutta" と題して、次のような興味深い発表をしている。

テーラヴァーダの戒経（パーリ戒経、パーティモッカスッタ、波羅提木叉）は、一般的に、そしてまたほとんど間違いなく最古の現存する仏教文献の一つであると考えられている。パーリ戒経より新しい戒経の異本が、テーラヴァーダとは別の諸部派の律のなかに伝えられているので、戒経そのものは容易に比較研究がなされている。その結果、戒経の構成上の問題については今までいくぶん無視されてきている。さらに、パーリ戒経の起源をたずねるもっと最初にやらなければならない研究がほとんど忘れられているようである。だから、戒経はどのように作られたか、とくに、どのように仏教徒が典型的に仏教の方法において新しい条文を作ったか、ということについて明らかにしようとするものである。なぜならば、後期ヴェーダ時代のバラモン苦行者たちのために規定された規則が戒経の背景に見られることから、いくつかの基本的な戒経の条文はもともと非仏教的状況のなかで作られ、それらが戒経のなかに組み込まれたのである。一方、新たな条文が明白に特色ある用語を用いて作られていった。

次に、氏は、戒経の全体的な構造の配列について注目している。戒経は、重い罪から軽い罪になっていく順序のグループに分けられている。波逸提法（パーチッティヤ）のような、戒経のなかの九二条もある大きな条文は、十条一組に細分されている。十条一組の最初の条文は、ときどき、それぞれのグループのなかの最初の条文の特別な表現をもって示されている。また、十条一組のなかでは、一つ一つの条文が、少なくとも部分的に連鎖的に結びついている、と具体的な資料にもとづいて氏は発表した。

つづいて、中川正法氏（筑紫女学園短大）は、"On Pārājikam in the Vinayasūtravṛtti" という題で次のような内容の発表をした。

中川氏は、根本説一切有部の著名な律師 Guṇaprabha（徳光）が著した Vinayasūtra とその自註を校訂中である。氏の校訂は、インドのパトナにあるビハール・リサーチ・ソサイティのラーフラ・コレクションのなかの貝葉写本の写真にもとづいてなされている。もともと V・V・ゴーカレ教授がその校訂を手がけ、P・V・パパット教授とともに、その最初の部分の校訂を出版している（Vinaya-sūtra and Auto-commentary on the same, Chapter 1—Pravrajyāvastu, Patna, 1982）。中川氏はゴーカレ教授よりその写本の校訂を引継ぎ、これまで第一波羅夷（パーラージカ）（不浄戒）と第二波羅夷（不与取戒）の最初の部分まで校訂研究をすませて発表している。さらに、波羅夷について、パーリ、漢訳の諸律典との比較によって研究を進めている。

発表では、『ヴィナヤスートラ・ヴリッティ』における第一波羅夷の構成、他の律典との関連、比較、引用文献などについ

てとりあげている。グナプラバがいくつかの用語や罪の判断基準を他の律典から引用している。あるときは、‘iti atra granthaḥ’ あるいは ‘grantho’tra’ とあり、またあるときは ‘Upāliparipṛcchā’ と記されているが、原典名は明らかにならないことを述べた。さらに、『ヴィナヤスートラ』の波羅夷の部分の用語が Mahāvyutpatti（翻訳名義大集）における律関係の用語に関連があることを指摘している。

次に、Ute Hüsken女史（ゲッチンゲン）は、“Conflicting Rules in Buddhist Monastic Law”と題して下記のように発表している。

律蔵は、われわれに伝えられた最も古いインドの法制度である。この種類の判例法は、たぶん矛盾・不一致が生じやすいものである。しかしながら、律の規則や条例には驚くほど相互に矛盾・不一致が少ない。律にみられる矛盾・不一致の多くは、たとえそれが、すでにその時代に廃止されていたとしても、律の編者がそれを取り除くことを躊躇したためであるといえる。それらの矛盾・不一致のいくつかによって、次のような問いがでてくる。すなわち、どのように個々の場合に実際に処理されたか、矛盾している規則のうちのどれを適用したか。律の注釈、『サマンタパーサーディカー』は、しばしば、その作者の解釈や実際の知識にもとづいて問題の解決をしている。それにもかかわらず、作者は、自分の解釈を支持するために律のなかから形式的な議論を常に持ちだしている。

『サマンタパーサーディカー』において用いている方法の一例を示せば次のようである。一方では、戒経において、「（七一）いずれの比丘尼といえども二〇才未満の童女を受具させれば波逸提（パーチッティヤ）である」とあるが、また「（六五）いずれの比丘尼といえども一二才未満の嫁に行った女を受具させれば波逸提である」とも記されている。他方、女性の具足戒羯磨のときの質問の一つに、「二〇才に満たしているか」と問うことになっている。『サマンタパーサーディカー』の作者はこの矛盾をたいへん巧妙な方法で処理している。すなわち、「二〇才」という語は、一つの最も基本的なあり方を示しているのであって、必ずしも具足戒を受けられる女性の実際の年令を言っているのではない、と説明している。

発表の四番目に、ストラスブルグ大学の Boris Oguibénine 氏は、“Linguistic Notes on the Bhikṣunī-Vinaya”という題で絶対詞の問題をとりあげている。Bhikṣunī-Vinaya の文章における絶対詞には二種がある。（一）絶対詞のシンタックスの特徴が古典サンスクリットと異なることのないもの、（二）古典サンスクリットにおいて不可能ではないが、それはむしろ仏教サンスクリットにおいてよく好まれて使われているもの、とである。それらの用法について資料にもとづいた具体的な発表であった。

最後に、パネルの召集者である Haiyan Hu-von Hinüber 女史（フライブルグ）は、“A Survey of Recent Studies on Buddhist Early Vinaya (1977-97)”と題して、近年の律研究の動向をまとめ、このパネルの意義について次のように述べた。

Ch. S. Prebish による律研究に関する報告（'Recent Progress in Vinaya Studies', Studies in Pāli and Buddhism, ed. A.K. Narain and L. Zwilling, Delhi 1979）が刊行されてからほぼ二〇年になる。その間、世界の学者たちは律研究の分野で多くの新しい成果をあげている。多くの論文、書物などが出版されたが、また近々刊行されようとしている。したがって、研究の現状をここで評価することは意義のあることである。これまでどのような研究の発展をなしてきたか。二〇年前より実際どのようなことを知るようになっているか。律研究のどのようなところに今立っているか。将来どのような方向に進もうと考えるべきであるか。

この発表は、一方では、過去二〇年間に刊行された初期の律文献に関する研究書にたいしてコメントを加えることであり、他方では、このパネルの参加者の間で将来さらに律に関する議論がなされるための一つの礎を自分が提供することである。

よく知られているように、仏教教団の戒律は一つの組織的にまとまったものである。異なった部派の律文献は、それに関連する多くの問題と同様に、相互に密接に結びついている。したがって、律に関するこの第一回目のパネルが、研究者間のコミュニケーションを盛んにし、われわれの研究に刺激をあたえることに少しでも役に立つことができればと希望している、と女史は発表した。

ところで、仏教の戒律をテーマにしたこのパネルではレジメや発表資料が準備されていたので、参加者から多くの質問もあった。常に Oskar v. Hinüber 氏が中心になり、活発に討議がなされ、パネルとしての成果をおさめたと言ってもよいであろう。最後に、パネルの召集者であるヒニューバ女史は、仏教戒律研究のこのテーマを一九九九年の八月にスイスのローザンヌで開催される国際仏教学会において再度とりあげたいと述べた。パネルが終わってから、女史は筆者に、ローザンヌには日本から戒律研究者が参加するように伝えてほしい、と言っていた。

「仏教研究」の部会ではもう一つのパネルが開かれた。A. Lochan（Delhi）がコンヴィーナーとなって、「アジア芸術におけるヒンドゥー教・仏教遺産」というテーマのパネルであるが、次の発表があった。

Thomas Stuart Maxwell (Bonn): Viśvarūpa in India and Southeast Asia

C. Prapandvidya (Bangkok): Buddhism as Recorded in Early Inscriptions Found in Thailand

Elena Schmidt (Neuss): Buddhist Heritage in the Islamic Republic of Pakistan

Pinna Indorf (Singapore): Approaches to the Study of Southeast Asian Architecture

Paiboon Suthasupa (Chiang Mai): Plant and Vegetation in the Thai Mural Art in Chiang Mai

四

「仏教研究」部会では上記の二つのパネルのほか、プログラ

ムでは三〇ほどの研究発表が予定されていた。しかし、キャンセルや他部会への変更などもあり、実際には次の発表があった。なお、斎藤明氏の「仏教研究」部会および「サンスクリット研究」部会についての報告（「東方学会報　七三」）を参考にさせていただいたりとを記しておきたい。

Phyllis Granoff (Hamilton): Defining Sacred Space: Priestly Control and Contest in Some Medieval Sanskrit Mahātmya Texts

Koichi Shinohara (Hamilton): The Records of Mt. Lu—Constructing a Sacred Mountain in Medieval China

室寺義仁（高野山大学） The Formulation and Interpretation of the Āgama on Birth and Death

Heng-Ching Shih (Taipei): The Development of Buddhism in Modern Taiwan

森山清徹（仏教大学） The Svātantrika and the Prāsaṅgika-Mādhyamika: An Independent Proof-Formula (Svatantrasādhana) and the Correct Conventional Truth (Tathyasaṃvṛtisatya)

Shohei Ichimura（北米禅文化研究所） Determining Nāgārjuna's Dates and Region of His Activity as Logician and Dialectician in A.D. 50-150 in Western India

Judit Fehér (Budapest): Notes on Nāgārjuna's Ratnāvalī

Tamas Agócs (Budapest): The Diamondness of the Diamond Sūtra

小林圓照（花園大学） On the Concept of Maṇḍala in the Gaṇḍavyūha

Vesna A.Wallace (Half Moon Bay): Buddhist Gnosticism in the Kālacakratantra

Gurbakhsh Singh (Delhi): Buddhist Studies in Contemporary India

G. Bethlenfalvy (Budapest): Notes on the Life and Works of Two 18-19th Century Lamas of Zanskar

Manoranjan Pradhan (Santiniketan): Impact of Buddhism on Oriya Fiction

Linnart Mäll (Tartu): Buddhist Studies and Semiotics

Tigran K. Mkrtychev (Moscow): Art of Cave Buddhist Centre Kara-Tepe in Old Termez (Kushan and Postkushan Times)

Zsuzsanna Renner (Budapest) and Györgyi Fajcsák (Budapest): State and Preservation of Laotian Buddhist Art (Case Study of a Luang Phabang Temple and its Sculptural Collection)

Tatjana Kardos (Budakeszi): Cult of Tutelary Deities in Laos and the Chinese Tradition

上記の発表以外に、宮下晴輝氏（大谷大学）は"Svabhāva-problematic in the Abhidharma"と題して、初期アビダルマ論書においてsvabhāvaの語がどのような意味で使用されるようになったかについて発表した。

また、茨田通俊氏（東方研究会）は、“The Meaning of Tathāgata in the Avyākata-questions”と題する発表で、十無記に現われる死後の存在を問う定型句での Tathāgata について、如来という一般的な意味と、注釈者ブッダゴーサによる satta（有情）という解釈の共存を指摘し、これを「有情としての解脱者」と解することについて述べた。

筆者は、”Pratyeka-Buddha and his Roles in Early Buddhism”という題で、初期仏教における辟支仏とその役割について発表した。そのなかで、辟支仏は「スッタニパータ」「ダンマパダ」などの古層の原始仏典には現われないが、それらよりもやや新しい「サガータヴァッガ」の散文に現われている、と筆者が述べた。それにたいして、ヒニューバ氏は、「サガータヴァッガ」の散文の部分は韻文の部分と同じく、「スッタニパータ」や「ダンマパダ」と同じくらい古い層に属している、と意見を述べた。たいへん有益な意見であるので、それを参考にして辟支仏の起源を再考しなければならないと思っている。ヒニューバ氏はまた、「ニッデーサ」の年代について質問した。初期アビダルマの要素が見られるから紀元前二世紀である、と私が答えた。それにたいして氏は反論しなかったが、必ずしも納得したような顔をしていなかった。

五

「仏教研究」部会以外での日本人学者の発表を記せば、「サンスクリット研究」部会では、斎藤明氏（三重大学）は”Bhāviveka on the Madhyāntavibhāga”と題して発表した。「インド研究とインディー研究」部会では、山上證道氏（京都産業大学）は、“Bhāsarvajña's Criticism of the Buddhist Citrādvaitavāda”という題目で発表した。「東アジア」セクションの「中国研究」部会では丸山孝雄氏（目白大学）の発表“Bodhisattva's Stages Attaining Buddhahood: Chinese Lotus Sūtra Commentaries”があった。また、同セクションの「日本研究」部会において「古代から近代における日本化」というテーマのパネルが設けられ、高崎直道氏（鶴見大学）による“Japanization of Buddhism”と題する発表があった。

さらに、発表はなかったが、ウィーン大学のシュタインケルナー氏も参加し、とくに仏教論理学に関する発表にたいして啓発的な意見を述べていた。

筆者が今まで参加した研究会議ではインド人学者の質問や発言が目立ったが、今回の「仏教研究」部会ではインドからの参加者が少なく、質疑応答にいささか活気がなかった。

「仏教研究」部会を中心にしてであったが、五日間にわたる研究発表を聞きながら、研究会議の大会に関してさまざまなことが頭に浮かんだ。個別の研究発表のほかに、もっとパネルを重視し、発表資料やペーパーの準備が望ましい。それとともに、近年の研究成果についての報告と情報交換をおこなうことも有意義に思われる。